

一般化可能（他の課題や対象者でも同じような結果が得られるか）であるかどうかについては今後も検討が必要であろう。

乳幼児の泣き声に対する母親の情動反応：泣き声不快尺度および育児ストレスとの関連

高橋 有里

本研究は、乳幼児の泣き声が母親に与える影響に焦点をあて、泣き声に対する育児中の女性の情動反応を乳幼児泣き声不快尺度および育児ストレスとの関連から考察することを目的に行った。

本研究は3部から構成される。

研究1は、泣き声に対する特性を主観的に測る「乳幼児泣き声不快尺度」作成の検討として、20～40代の女性148名を対象に質問紙調査を行った。様々な場面で聞こえる泣き声への耳障り程度を問う項目を作成した。因子分析の結果、社会的に迷惑のかかる状況での「公的状況不快」と社会的に容認されると考えられる状況での「私的状況不快」の2因子が抽出された。とくに私的状況不快は特性不安、特性怒りともに有意な相関があり、私的状況不快得点が泣き声に関連した育児ストレス程度の指標になると推測された。

研究2は、現代の母親の育児ストレス状況と関連要因の検討として、乳児を育児中の10～40代の女性199名を対象に質問紙調査を行った。育児ストレス度は、特性不安、母親役割に対する意識、夫との関係性のストレス、子どもへの否定的な感情によってある程度規定されることが明らかとなった。一方で、子どもへの肯定的な感情は相関がなく、育児ストレスに影響していなかった。また、子どもの病気や心配事がある母親、生後6ヶ月児以上の母親の育児ストレスが高かった。

研究3では、研究2の育児ストレス度高群・低群の母親10名ずつを対象とし、乳児の泣き声を聴取中の情動反応を心理生理的指標により測定した。他人の乳児の泣き声を聴取中の心拍数、皮膚コンダクタンス変化と、聴取後の拡張期血圧、および主観的評価を、安静時と比較した。その結果泣き声は、母親の抑鬱・不安、敵意、非活動的快といったネガティブな感情を高める刺激であることが分かった。しかし、育児ストレス度による差は明らかにできなかった。本実験の被験者は一般的なストレス範囲内であったため、確認できるほどの差が現れなかったと考えられた。一方、乳幼児泣き声不快尺度では、私的状況不快度の高い母親が時間経過とともにストレスを強く感じた結果が得られ、泣き声に対する耐性が弱いことが示された。したがって、乳幼児泣き声不快尺度と生理指標に整合性があったと言えた。

今後、乳幼児泣き声不快尺度のさらなる信頼性と妥当性が確立されれば、虐待予備群となる育児ストレスの高い母親の早期発見に利用できるのではないかと考えられる。

児童養護施設における「問題の外在化」アプローチ 藤井 沙苗

本研究は、児童養護施設に入所している児童に対して「問題の外在化」アプローチを試行し、事例を通してそのメリットとデメリットを示すとともに、セラピ

ストが生活に関与することでの利点と限界を検討し、これまで報告のない児童養護施設で「問題の外在化」を用いた場合について、実証的に明らかにすることを目的とした研究である。

その結果、これまでに示されてきた「メタファーのもつ力」「ユニークな対処法」「二項構造から三項構造へ」といったメリットが、本研究でも確認できている。さらに、児童養護施設という特徴上、治療への動機づけが低かったり、自尊心が乏しく、不信感が強い傾向の子どもたちであるため、「問題」を語るのが苦手であること、また、「退治する」より「つき合う／共存する」方がより適当であろうということが示唆された。さらに、これまでのような「家族療法」ではなく「個別心理療法」のスタンスをとったため、「問題」そのものを解決することは困難であり、「問題」の状態を把握する、対処法をコンプリメントするといったところに留まった。なお、筆者が生活場面にも関与するものの、面接の構造は保つことができた。ただし、児童養護施設のセラピー特有の課題はあり、現場にあわせた工夫をいっていくことが必要である。

これまでの報告とは若干手続きやその効果が異なるものの、児童養護施設においても「問題の外在化」アプローチは有効であることが分かった。今後、さらに事例を積み重ね、児童養護施設で「問題の外在化」を用いる際の手続きのモデルを作る等、さらなる検討を加えていきたい。

面接で語られた女子学生の過去から現在までの母親に対する感情経験

朴澤 祥子

本研究では、19名の女子学生に対して面接調査を行い、これまでの母親との関係や葛藤経験について振り返り語ったものを逐語文字化したデータから、母親に対する感情について山岸（2000）の分類カテゴリーを参考に内容分析を行った。さらに語られた葛藤内容を明らかにし、より問題の強さが感じられる事例について考察を行った。

その結果、まず母親に対する感情の各時期の全体的特長からは、小学校の時期では母親からの「強い統制」、中学校の時期では、母親との関わりを避けようとする「回避や嫌悪」、高校の時期では、意見を尊重してくれるなどの「大人としての扱い」、大学生・大学院生である現在では母親の生き方・あり方を受け止め参考にするといった「先輩・モデル」といったカテゴリーに分類される表現が多かった。この発達的变化は、第1章でも述べた心理的離乳（平石,1990）のプロセスや分離個体化過程（Blos,P.1965）と同様の様相がみられている。

また、中学校の時期での結果からは、母親の何気ない言動や存在自体に苛立ちを感じるものの、それを母親にぶつけることはあまりなく、関わりを避けることでそれらの苛立ちを解消する者が多いということがわかった。中学校の時期の反抗については、自分の主張をなんとか聞いて欲しいという強い訴えであったと振り返って述べる者もみられ、表面的には母親を嫌っているような言動を示しているにもかかわらず、実際には愛情欲求の現れでもあるということが考えられた。

問題や葛藤の強さが感じられる事例からは、母親からの愛情を感じることができないために「愛されていない」「愛情欲求」などの表現が多くみられ、そのために距離を感じる、どう接していいかわからない、といったことが話されていた。母親から愛されているという実感をもつことが、母親に対して安心して意見をぶつけるための必要な条件であるとも考えられるだろう。

これらの結果は第1章で述べた先行研究と一致するところが多いが、一方ではいくらかの違いもみられた。例えば、中学校の時期の母親へのアンビバレントな感情などは、今回の面接で明らかになったことである。先行研究(特に質問紙法のもの)では、こうした感情はうまくとらえられていないようである。したがって、今回用いた個別面接法は、この点で有効であったといえる。

フォーカシング的態度尺度と臨床的妥当性についての検討

村澤 香苗

フォーカシングとは、Gendlin (1981) により開発された、心理療法・カウンセリングの方法である。何らかの意味をもっている身体感覚（フェルト・センス）に注意を向け、その身体感覚から内なる自己がその人に伝えているメッセージを聴くことにより、自己の気づきを促し、こころを癒していく独特のプロセスである (Cornell, 1996)。

フォーカシングの過程を進めるために重要なことは、からだに注意を向けながらゆったりとした心構えで待つといった、ある種の態度を保つことである。福盛・森川 (2003) は、このようなフォーカシング特有の態度のことを「フォーカシング的態度」と呼び、日常生活でのフォーカシング的態度を測定する尺度、The Focusing Manner Scale (以下、FMS) を作成した。フォーカシング的態度を測定する尺度であるFMSが作成されてから、FMSとGHQ (福盛ら、2003) や、FMSとTEG (中垣・池見、2005) との比較により精神的健康度との関連が検討されたり、FMSと抑うつとの関連 (山崎、2004) が調べられている。フォーカシング的態度が高いと精神的健康度も高くなるということは明らかになっているが、実際のフォーカシング・セッションの内容との関連については研究されていない。

そこで本研究では、フォーカシング未経験者を対象にフォーカシング・セッションを行ない、その前後のフォーカシング的態度を測定し、セッション内容と比較することで、FMSの臨床的妥当性を検討する。その際、フォーカシング的態度 (FMS得点) の高さの違いにより、フェルト・センスの四つの側面やセッション後のFMS得点に、どのような違いが現れるのかについて検討することを目的とし、調査を行なった。

FMS得点の高低により、高群・低群の2つに分け比較検討した。セッション内容を、イメージを除くフェルトセンスの3つの側面とフェルトシフトから検討したところ、低群において、フェルトセンスの3つの側面すべてに触れている方、フェルトシフトに至った方が比較的多いという結果になった。セッション後のF

MS得点に関しても、低群が総得点と第一因子である体験過程への「注意を向け」尺度の得点が有意に高くなるという結果であった。仮説で、FMSの第一因子はフォーカシング体験を通して身につく態度としての要素が強いと予測していたが、この仮説は低群において支持された。

FMSの臨床的妥当性については、FMS得点の高さの違いによる、高群・低群間のフェルトセンスやフェルトシフトなどのセッションの進み方に関する大きな違いは見られず、フェルトセンスの3つの側面という視点では高群・低群間の違いを見ることはできなかった。しかし、その他の指標においてはいくつかの特徴的な違いが見られた。高群の中には、導入の「からだの感じ」ワークを行なっただけで楽な感じを体験できた方、嫌な感じがあったとしても程よい距離を保ちながらセッションを進めることができた方が多かったことである。また、頭での考えが高群においては1名しかおらず、フェルトセンスが出てくるのをゆっくり待つというフォーカシング的態度が備わっていることを示す証拠ではないかと考える。

今回の調査では、フォーカシング的態度を測定しているかどうかを明確に裏付ける根拠が挙げられなかった。今後の課題として、今回の結果を踏まえて、新たな方法を考える必要がある。まず、フェルトセンスの3つの側面に触れるところで一連のセッションを終了していたが、生活や人生との関わり合いの側面に関してさらにセッションを進めていくことや、1回だけではなく何度かセッションを重ねてみたときに、その進み方に特徴が現れてくる可能性がある。また、今回の調査で、高群のFMS得点が減少した要因について検証するため、セッションを行なわない統制群との比較が必要である。